

經濟論叢

第122卷 第5・6号

マルクスにおける生産諸力の概念について(1)…平 田 清 明	1
17世紀イングランドの土地所有 ……………尾 崎 芳 治	23
不確実性と公共投資 ……………羽 鳥 茂	40
Plant 鉄道システムにおける予算制度の創設 …森 川 章	66
ドイツ第二帝制におけるイヌノクの再編成……後 藤 俊 明	88

經濟論叢 第121卷・第122卷 総目録

昭和53年11・12月

京 都 大 学 經 済 學 會

マルクスにおける生産諸力の概念について (1)

——生産力の弁証法——

平 田 清 明

目 次

- I 序にかえて——表象と概念のはざまに——
- II 資本の生産力と労働の生産力
 - 1 資本の生産力の形態性
 - 2 労働の本質諸規定
- III 労働の社会的生産力
 - 1 社会的生産力の諸規定
 - 2 社会的生産力の倒錯性と変革性（以上本号）
- IV 生産諸関係と生産諸力（以下次号）
 - その要点開示——
- V 集合的労働者の概念
 - 資本の生産力の主体的本質——
- VI 潜勢としてのコミュニズム
 - 資本の生産諸力の弁証法的旋回——
- VII 結語にかえて——人間力と自然力との回復

I 序にかえて——表象と概念のはざまに——

生産力。この語は、この私達の国では不思議と歴史的変遷を閲してきた言葉である。

この語は、少なくとも第二次大戦時以来、この国において最もポピュラーな日常語の一つである。と同時に、すぐれて経済学的な用語であり、しかし総括的な社会科学的概念である。そして、このこと自体が、大戦時以降の日本社会の或る特質を表現している。

いま1978年の現時点において、日本をふくむグローバルな経済危機の中で、

生産力のあり方を問う殆ど枚挙のいとまない批判的提言を、私達は眼前にしている。とくに国民総生産（GNP）の存在構造をめぐる殆どすべての論議において、この話が体制認識の必要とする概念装置の一つとして登場するのを、日々、眼にしている。

GNPの太いさにおいて表現される生産力の高さ。それは今では批判的考察の主題目とされる。そしてそのような生産力批判がロマンティックなリアクションとみなされることは、今では殆どない。ゼロ成長の不可避性を説くローマクラブが、ブルジョアの現代でのイデオロギー的集約場であることを願みれば、このことはあえて奇とするに足らぬ平凡事なのであろう。

しかし、やはり多くの日本人にとって隔世の感あらたなるものを覚えさせる言葉である。この生産力という語は。

戦争中、開戦の日から敗戦の日まで語られたのは、“生産力の増強”であった。そして戦後の焼け野原では“生産力の回復”であった。焼けのこった大学では「生産力における東洋と西洋」（大塚久雄『中央公論』5月号、1946年。のち『近代化の歴史的起点』、学生書房、1948年に収録）や「生産力の構造」（高島善哉、『経済評論』1948年8月号）が講ぜられ、学の内外で論じられた。——戦後日本社会再建の理論的思想的基準がそこでは探求されていたのである。

1955年—6年以降、資本主義的再生産軌道を確立した日本社会は、“もはや戦後ではない”という自己診断を誇示しつつ、グローバルな生産力競争に耐えるべく、いわゆる技術（導入）革新—設備投資の奔流に身をゆだねた。そして1973—4年、石油危機—経済恐慌にとらえられた。60年代を通じて進行した生産力—産業構造の変革が惹起した公害・環境破壊の累積は、すでに、そこに形成された生産力に対する根底的な批判を提起していた。国際的な燃料・資源危機は、ブルジョアの地平においてさえ、その生産力のあり方への再検討を促すに至った。

あらゆる角度から、また、あらゆる利害関心から、生産力批判が、始まった。それは、遅きに失していただけに、バセックであった。そのためか、充分な

用意を欠く場合も、少なくなかった。また、その批判の、いわば全人類史的正当性が、ブルジョアのシニズムに利用される場合も、まれではない。

そのような時潮の中で、或る種の思想史の変調が起っている。——マルクス主義もひろくは生産力増強主義の思想と理論であり、この点で社会認識の功罪を他の思想・理論（たとえばケインズ主義）と共にする、という半ば攻撃的な批判が、起っている。

この批判は全く根拠のないものではない。マルクス主義を思想的理論的核心とする社会主義運動の、60年代総体を通じての全帰結が、何であったか、まさにこの総括が、客観的に階級的な利害状況のなかで、いま求められているのである。

生産力の重化学工業——大量生産・消費体制としての展開に対する理論的に批判的な省察が、これまでに無かったわけではない。マルクス主義の現代的展開として、そのような批判的な省察が鋭く提示されたことも、少なくない。たとえば、井汲卓一「新しい生産力と新しい組織化」（『東京経済大学70周年記念論文集』1970年12月）は、その象徴的一論稿であろう。

しかし、このようなマルクス主義的な省察の批判力は、反生産力主義をも自己の補完物とする生産力的産業体制たる現代資本主義の社会的圧力に押し流されているかに見える。

だが、その流れに抗する思想的営為は絶えていない。本稿の後論に挙示する諸論稿は、それらのうちの若干例である。いま私は、それら論稿執筆者たちとともに、生産力の概念を反省する試論をここに提示しようと思うのである。私自身に対して、課題を生産力のマルクス主義的な概念の再措定に限定して、この共同の営為に、私なりに参加しようとするのである。

先学高島善哉教授は、新著『生産力の理論』を構想し、その序論たる新稿「生産力理論の問題関心——その射程と基礎視角について——」（関東学院大学『経済系』第116集、1978年6月）を発表された。拙稿は、この先学の広大な「問題関心」の一隅に所在する理論的文獻史的問題の解明を志向するもので

ある。

II 資本の生産力と労働の生産力

1 資本の生産力の形態性

今日、生産力について設問するとき、ひとは、この生産力が（価値法則に立脚する）価値合理性の上に成立していることを、殆ど自明の自然事としている。17—8世紀以来のブルジョア的経済学が検討の域外に置いてきた、いわゆる外部不経済と内部経済との関連を、あらためて問い直すとき、ひとは、“内部化”の名のもとに価値合理性（価値法則）の貫徹を想い浮べる。そこには、いわば近代の宿命ともいべき規定性が、明らかに見られる。

この規定性において生産力を顧みるとき、それを構成するものとされる諸要素のおのおのにつき、合理的な経済計算が密着しており、それら諸要素そのものが資本価値の諸部分にほかならぬことが自明視されている。たとえば、原料の発注、機械の選択、労働者の雇用と就業条件の決定、等々。これらの計算は、純技術的と見える場合でさえ、資本の運動としての採算性を、一刻たりとも疎かにしえないものである。すなわち、生産力は、今日の社会における大宗において、資本の規定性を免れない。この点につき以下の諸点が留意されるべきであろう。

その1。今日、支配的な生産力は、資本すなわち自己増殖する価値の社会的実現を自然史的に媒介する力である。言い換えれば、自然科学的技術の開発・発明はもとより、その労働過程への導入もまた、資本の形態規定を受ける。それら技術がパテントとして私的に所有され、或いはいわゆるノウハウとして、その殆どすべてが、資本の組織形態たる諸制度（株式会社等）に帰属することは、このことの制度的証左であるにすぎない。

その2。今日、支配的な生産力は、資本の諸組織形態（上述の株式会社等）および資本の共同体としての国家組織において、組織的制度的に客観的な姿で形成されている勤労諸個人の社会的生産力としてある。人的および物的な生産

諸要素の“集積の利益”あるいは“規模の利益”といわれるものが、それを経験的に告知している。

その3。この社会的生産力は、勤労諸個人の労働の社会力であるが、それは自己のうちに前述の労働の自然力を含む。そして、そのような自然的社会的生産力が資本の形態規定を受け、資本の生産力として実在する。

このこと概念把握（ベグライフェン）のための思惟の歩みが、マルクスの著作『資本』を、批判的意識のうちに呼び戻す。そしてこの還帰においては、資本の生産力は労働の生産力に方法論的に還元され、そこでの一般的規定が検出される。そして後、ふたたび資本の生産力たる形態諸規定が理論的に再獲得される。

以下にその要点を論述していくが、その展開にあたつての引照文献は『資本』（ドイツ語版およびフランス語版）を中心とし、必要な場合、適宜、『経済学批判要綱』および『剰余価値学説史』を援用することとする¹⁾。マルクスにおいて最も成熟した姿態での概念とその諸規定が、何よりもまず、ここに必要だからである。

2 労働の本質諸規定

最初に検討されるべき「労働の生産力」にかかわる引照圏域は、直接には『資本』第Ⅰ部第3・4・5篇たるいわゆる剰余価値論3篇である。労働の生産力が資本の生産力として実現しているかぎりでは、第Ⅱおよび第Ⅲ部を含む『資本』総体が検討されるべきであること、言うまでもない。なかでもとくに第Ⅱ部第3篇再生産表式篇が、そしてまた第Ⅲ部第1・2・3篇たるいわゆる利

1) 本稿の引用するマルクスの諸著作と邦訳書、およびそれらの略記法は、次の通り。Das Kapital, 3 Bde., besorgt vom Marx-Engels-Lenin-Institut, Moskau, Dietz Verlag, Berlin, 1957. Le Capital, éd., Maurice Lachâtre et C^{ie}, Paris, 1872-5, by Far Eastern Book-Sellers, Publishers, Tokyo, 1967. 長谷部文雄訳『資本論』全13冊, 青木書店。(K. I. 175, C. 71, ② 315)のようにページ数を略記。Grundrisse der Kritik der politischen Ökonomie (Rohentwurf), 1857-58, Dietz Verlag, Berlin, 1953. 高木幸二郎監訳『経済学批判要綱』全5分冊, 大月書店。(Gr. 203, ② 215)のようにページ数を略記。

潤論諸篇が、あらためて参照されるべきである。第Ⅰ部に限定して、従来の問題史的状況を顧みれば、しばしば援用される第3篇第5章「労働過程と価値増殖過程」のみならず、第5篇第14章「絶対的および相対的剰余価値」が、検討の俎上に上せられねばならぬ。E・バリバル²⁾がすでに指摘しているように、この第14章は、そしてまたこの第Ⅰ部第5篇は、第Ⅰ部での剰余価値—生産的労働論諸篇の「結論」をなすものだからである。この篇およびこの章は、『要綱』での労働過程論と『資本』のそれとの関連を明示するものであるだけに、一層、重要である。そこで主題化されている「労働過程の科学的過程への転化」のもつ理論的意義の究明にあたっては、第Ⅲ部前掲諸篇とくに第5章「不変資本充用上の節約」に、そしてまた第14章「反対に作用する諸原因」・第15章「法則の内的諸矛盾の開展」に、関説することが必要である。

本稿は、これらの引照諸部分のうちから特に形態論的な関連の深い本質諸規定の検出に努めることにする。

i 労働力能とその頭勢態

ここでまず最初に次のことを確認すべきである。——労働の生産力は、それ自体が頭勢態または現実態（エネルギー）として実存する力である。それは、労働対象に働きかける（関係行為する *verhalten*）労働の諸力、そして、労働生産物のうちに対象化する諸力である。この意味において、それは「生産的労働」の諸力である。この諸力は、そのものとしては、たった今述べたように、現に頭勢している力である。炎として燃えている火の力である。この火の力は、自然力たる人間力（頭脳・筋肉・手足等）のエネルギー発現であり、人間力たる自然力（原材料および燃料としての自然的諸資源）のエネルギー発現である。言い換えれば、「人間的有機体」の「社会的生産有機体」としての機能発現力であり、また人間と自然との永遠な物質代謝の媒介＝実現力でもある。

2) L. Arthusser et E. Balibar, *Lire le Capital*, II, 1965, p. 133. 権寧・神戸仁彦訳『資本論を読む』, 1974年, 236ページ。

(付論) 念のために記しておくが、「労働はすべての富の源泉ではない」。「自然もまた労働と同程度に諸使用価値の源泉である」。

マルクスが「労働は質料的富の父であり、土地はその母である」ことを、W・ペティを援用して提言したことは、よく知られている。しかし、よく知られていないことがある。——自然に対する人間の主体的関係行為の意義を、自然による逆規定の軽視あるいは自然そのものの二重化（人間的・自然的自然と自然的人間とへの分化）の無視において、強調するのは、それ自体がブルジョア的な態度である、とマルクスが批判していたことである。彼は述べていたのである——「人間は、あらゆる労働手段と労働対象との第一の源泉たる自然に対して、はじめから所有者として関係を結び、それら労働手段と労働対象とを自分に帰属するものとして取り扱う」³⁾ものであるとするのは、「ブルジョア的な言い方でしかない。」

ここに、力として顕勢する労働。それは、それ自体が「生きた人格性」としてある「人間の身体性」のうちに宿る「労働力または労働力能 (Arbeitskraft oder Arbeitsvermögen=force ou puissance de travail)」の「発現 Äusserung」または「実証 Betätigung」である。

この「労働力または労働力能」という概念は、なかなか、くせ者である。それは『資本』では「人間の身体性すなわち生きた人格性のうちに実存する、何らかの種類の使用価値を生産するたびに用いられる、肉体的および精神的諸力能 (Fähigkeiten=facultés) の総括 Inbegriff=ensemble」(K. I. 175, C. 71, ②315) と定義される。

ここで「諸力能」が Vermögen と表現されるとき、それは『要綱』以来、「財産」ではなくて「潜勢としての力」を示す。フランス語の puissance はこれを明示する。「労働力」がこの「労働力能」に等しいと強調されるとき、

3) K. Marx, Kritik der Gothaer Programms, 1875, Marx-Engels Werke, Bd. 19, 1962, S. 15. 邦訳『マルクス・エンゲルス全集』第19巻, 1968年, 15ページ。なお、椎名重明『農学の思想』1976年, 173ページは、この点への問題関心を喚起している。

それはすぐれて潜勢的な諸力としてある。したがってそれは、直接に外的な対象性を有しない。それは、『要綱』の規定を援用すれば、「純粹に直接的であることによって、同じくまた直接的に非対象性である」ものである。そして、それは「その担い手の直接的身体性と一致する対象性」「その人格から切り離されていない対象性」を有するのみである。この意味においてのみ、それは対象的存在であって、それ自体としては「客観的形態では非対象的な存在そのもの」である (cf. Gr. 203, ②215)。このような意味で非対象的な潜勢的存在 (すなわちデュナミス) が、一定の条件において、顕勢化するのである。

この顕勢化を媒介する客観的条件を確定する前に、もう一つのことが確認されておらねばならぬ。それは、「労働力は人間的有機体に転態された自然質料である」(K. I. 223, C. 92, ②383) という一事である。この転態をとげた自然質料としての労働力は、それ自体が「一つの自然対象」にほかならない。つまり、「労働力」がイ--コール「労働者」であるかぎり、それは、この労働者という存在において、人間化された自然として対象性を有する。

しかし、この、いわば自然的な対象性が実存するのは、労働者が社会的存在として、社会的に对象的な存在として措定されているからである。すなわち、その存在が、貨幣によって時間決めで購入されるべき対象として措定され、この貨幣に購入されてそれ自体が社会的力となったとき、その自然的対象性が社会的対象性として実在するのである。

このときすでに、対象性は実体性となっている。すなわち、力は発現している。

もし、この、貨幣による労働力の対象としての措定 (交換過程) がなければ、この力は対象的存在ではない。それは、社会的・自然的に潜勢的存在でしかない。

『要綱』のマルクスは、アリストテレスの「質料」概念の発展としてのスピノザの「実体」概念を援用して、労働力能としての労働者そのものを「普遍の実体 allgemeine Substanz」と規定し、「この実体の特殊な力能展開への様

態変化 (modifizieren)」として労働を概念把握した⁴⁾。

『資本』のマルクスは、その労働過程章を次の一句をもって開始した。

「労働力の使用は労働そのものである。労働力の購買者は、その販売者を労働させることによって労働力を消費する。労働力の販売者は、労働することによって顕勢的 (actu) に自らを実証しつつある労働力・労働者となるのであって、彼はそれ以前には、ただ潜勢的 (potentia) にのみそれだったにすぎない。」(K. I. 185, C. 76, ②329)

ここに明示された顕勢と潜勢の弁証法的概念構成を抜きにして、およそ労働、労働力、そして生産力を、我々は論ずることができない。この「労働過程」冒頭句は、それ自体が「生産一般」の本質規定である。したがってまた、資本家的生産過程の根源を制約するこの弁証法的構成こそ、生産力を今日論ずるにあたって、まず最初に確定されるべきものである。

ii 物質代謝の媒介としての労働＝過程

ここに顕勢＝現実態 (エネルゲイア) として確認された労働は、「人間と自然との間の一過程」としてある。「人間と自然との物質代謝を、人間が、自分自身の行為によって媒介・規制・コントロールする過程」(ibid.) として存在する。このような意識的「行為」が客観的に存在する。そのようなものとして労働＝労働過程は、「人間と自然との間の物質代謝の普遍的条件」(K. I. 192, C. 79, ②339) であり、「人間生活の永遠的自然条件」(ibid.) である。

かのスピノザの「普遍的実体」として措定された労働者が「普遍的可能性」としての「自己の労働力能」を発現するとき、その現実態は自然質料の形態変換を媒介する。「物質的基体 Substrat」(または「自然的実体 Substanz」) たる綿花を、綿糸に、そして織物に、転換する。「自然の提供する諸質料を、メタリツヒ 可能的な使用価値から現実的かつ効果的な使用価値に転換させること」(K. I. 191, C. 78, ②338)。これが労働の「使命」(Bestimmung) である。

4) 花崎皋平『マルクスにおける科学と哲学』(増補版、1972年)第3章「社会的生産の視点と論理」に教えられた。なお、同氏の別稿「弁証法的自然」(花田圭介他、共著『われわれにとって自然とはなにか』1970年所収)もまた示唆深い。

このような質料変換＝物質代謝たる「行為」は、きわめて目的意識的なものであるが、しかし、それはあくまでも人間をも含む自然そのものの物質代謝の外に出るものではない。この意識的行為たる労働は、「人間の協力なしに天然に現存する物質的基体」たる諸質料に関係行為し、その形態を変換する「形態形成（変換）労働 *Arbeit der Formung*＝*œuvre de transformation*」（K. I. 48, C. 16-7, ①126）にほかならないのであるが、「この形態形成（変換）労働そのものにおいて、人間は不斷に自然諸力によって支えられるのである。」（*ibid.*）すなわち人間的労働は、それ自体が「自然的質料変換過程」の一契機たるにすぎない。

我々はここに、人間的労働の本来的自然性を確認するほかない。そしてそこには「スピノザの実体一様態カテゴリー」⁵⁾の概念展開を見定めざるをえない。

だが他方、もう一つのことを確認せねばならぬ。すでに述べていることではあるが、労働＝労働過程は、「生産一般」としての「抽象的諸契機での叙述」において、依然として人間的労働であり、その過程である以上、「使用価値を生産するための合目的的活動」（K. I. 192, C. 79, ②339）である。

人間は、その「自然質料」に働きかけて、「その形態変化を生ぜしめるだけでなく、自然的なものの中に同時に彼の目的を実現する。」（K. I. 186, C. 76, ②330）この目的意識性において、人間の労働は蜘蛛の活動と本質的に異なるものである。このことをマルクスがきわめて適切に論述した。「蜜蜂はその蠟製の窩の建築によって幾多の人間建築師を赤面させる。だが、……建築師は、窩を蠟で建築する前に、すでにそれを自分の頭の中で建築している……。」（*ibid.*）

このことはすでに人口に膾炙している。

しかし、この点をめぐるマルクスの論述そのもののなかに、いままであまり留意されていないことが、いくつかある。その第一は、この目的の「法則」としての「全労働期間」にわたる規定性である。そしてその重みである。その第

5) 花崎前掲書、180ページ。

二は、この目的意識的活動とその自然的諸質料との関連のヘーゲルの説明様式である。そしてそのきわだちである。その第三は、この目的意識的な対象的活動そのものによる、思わざる潜勢諸力の形成である。そしてその默示的性格である。その各々につき以下に要点を解明する。

α) 目的は、それを定立する人間にとって「法則として彼の行動様式を規定する。したがって彼は、この法則に自分の意志を従わせねばならない。」ここに不可避となった目的への意志の従属。これは、人間的労働に避けたい受苦性である。「労働する諸器官の緊張」はもとより、「注意力として発現する合目的的な意志」そのものが、「労働自身の内容とその遂行様式」に制約されて、受苦的となる。(cf. K. I. 186, C. 76, ②330) この受苦 (Leiden) が目的と対立する。労働＝労働過程における、この根源的な自己矛盾。ここに、労働の解放は、労働そのものの使命である、という人類史的な課題がある。

β) ここに我々の見出す、労働過程における目的とその手段たる過程そのものとの矛盾は、この過程の客観的自然的諸要素が、過程＝主体たる労働の肉体として同化(＝内化)される過程として、展開する。これら諸要素の物質的形態変換としての物質的消尽のうちに目的が貫徹する。そして、それら諸要素の変換において、概念としての目的が受肉化し、そこに、人類史としての産業史＝市民社会史が展開する。このことをマルクスは次のように表現した。以下、数個のセンテンスに分節して掲げる。

「労働過程で役立たない機械は無用である。そればかりか、機械は自然的質料変換の破壊力の下で蹂躪される。鉄はさび、木材はくちる。織られもせず編まれもしない糸は、台なしにされた綿花である。」(K. I. 191, C. 78-9, ②338)

労働過程に介在する自然的諸質料は、「質料的生産諸関係」での規定的目的を担ったものである。したがってまた、それぞれの「概念と職分」を有するものである。そして、それらにふさわしく、人間的労働によって、これら諸質料は機能せねばならぬ。同じくまた、逆に、それら諸質料は人間的労働の対象化として肉体化されねばならぬ。

「生きた労働は、これらの物をとらえる。……それらのものは、労働の火になめられ、労働の肉体として内化され、過程中的のそれらの概念と職分に適合的な諸機能を果すべく、霊氣を吹き込まれる。……そこではたしかに消尽されるのであるが、……それは、新たな使用価値を形成するエレメントとして、この目的のためにこそなのである。」(K. I. 191, C. 79, ②338)

この叙述は、一見してヘーゲル的であること、明らかである。とくにこの一文中での「概念と職分に適合的な諸機能 *begriffs-und berufsmäßigen Funktionen*」は、目的適合的 *zweckmäßig* の転化語であり、ヘーゲルの目的概念を想起させる。すなわち、「目的とは、直接的な客観性の否定【すなわち消尽】によって自由な現存在に入った、対自的に存在する概念である。」(Hegel, *Logik*, § 204) とヘーゲルは書いていた。

ここでマルクスは、「偉大な思想家【ヘーゲル】の弟子」であることを公言している。そして、「彼独自の表現様式に媚を呈してさねいる。」(『資本』第2版後書き) 事実、マルクスは、その数ページ前で、労働過程に(労働手段や労働対象として)介入する自然的諸質料の「力学的・物理学的・化学的諸属性の、目的に応じた、利用」をもって人間的労働の特質とみなし、そこにヘーゲル『論理学』から引用した、次の一節を掲げているのである。

「理性は力あるものであると同時に、狡知に富んでいる。その狡知さは、およそ自分は過程の中に自ら入りこむことなしに、もろもろの客体を、それら自身の本性に従って相互に作用させ、働き疲れさせ、しかもただ自分の目的だけを実現する、という媒介的活動【の狡知さ】にある。」(Hegel, *Logik*. cf. K. I. 188, C. 77, ②333)

叙述様式のこのようなヘーゲルのスタイルの意識的援用は、スピノザ的自然史概念の人間史への転換の必要を強調するためであったであろう⁶⁾。

6) A. Schmidt, *Der Begriff der Natur in der Lehre von Marx*, 1962, Neuausgabe 1971. 元浜清海訳『マルクスの自然概念』(1972年)第2章(B). および, K. Kosik, *Die Dialektik des Konkreten*, 1963. 花崎泉平訳『具体的なもの弁証法』(1969年)第IIおよびIII章。これらの著作は、マルクスにおけるスピノザ的概念(「*能産的自然*」と「*所産的自然*」)を確認して、

r) この目的は、人間によって措定される。「生産一般」としての労働過程の抽象性＝根源性においては、労働者たる人間の措定するものである。そして、この目的の実現を媒介する彼の労働は、すでに指摘してきたように、「生きた人格性」としての彼の「身体性」のうちに宿る労働力能の発現である。それは、たしかに「自然質料そのものに対する一つの自然力としての人間の対応」である。このことにおいて、人間は、自己を二重に変革する。「人間はこの運動によって、外なる自然に働きかけ、これを変化させることによって、同時に彼自身の自然をも変化させる。」(K. I. 185, C. 76, ②330) このことはよく知られている。しかし、ここに無視されがちなことが、記されているのである。「……彼自身の自然をも変化させる彼は、彼自身の自然のうちにまどろんでいる諸潜勢力 (Potenzen=facultés) を発展させ、その諸力の働きを彼自身の掌握 *Botmäßigkeit* の下に置く。」(K. I. 185, C. 76, ②330)

労働による外的自然の変革と同行する内的自然の変革とは、生産物の産出＝外化において刺戟され、新たな形態をとろうとする潜勢諸力の全自然史的＝全人間史的形成なのである。そして、労働を実現させる社会的諸条件が、社会的に外的なものであり、労働生産物は、この外的制約を免れえないのに対して、この潜勢諸力は、労働者たる諸個人の人格性のうちに、彼自身の掌握下に置かれている。したがって、この潜勢力こそ、勤労諸個人としての人間の最も深い力能なのである。現実的な社会的諸条件の下で遂行される物質的および精神的な労働は、その発現たる外化(産出)において、その内的力能を発展させる。すでに指摘しておいた、人間的労働の本来の受苦性、その人類史的自己矛盾性。これが存在し、これが展開するかぎり、この内的力能が、外的産出の一步一步において、その展開を深め、かつ強める。

いま労働過程を生産過程の現実に戻らせよう。生産一般を資本家的生産の現実に戻させよう。

↪そこに歴史の潜勢的主体の弁証法の展開過程としての資本の運動過程を特質づける諸位相(諸審級)を分節＝連節した。1960年代以降におけるマルクス主義研究の新地平を開拓するものであり、『資本』研究の新生面を拓くものである。

このとき、「過程を支配する主体」＝「自動的主体」として、目的を定立するものは、自己増殖する価値としての資本である。この価値が、私的所有者間の緊張を対立に増幅させつつ、この対立を過程のうちに揚棄しようとする。この意味で「過程する価値」「過程する貨幣」として、この価値が、全目的を規定し、すべての自然的質料を、消尽させる。人間的労働力をも消耗させる。

しかし、この資本の運動は、その循環運動としての無窮動のなかで、その現実に対抗的＝抑圧的な性格をあらわにすればするほど、この階級的受苦性に対する批判＝反撃力を、勤労諸個人の人格性のうちに形成する。それ自身が人間的自働力の社会的にして自然的な変革の必然性として展開する。

もとより、この批判的＝および革命的潜勢力の顕勢化を抑止する階級的社会力量が、そこにはすでに形成されている。資本、貨幣、商品などの社会的形態諸規定が、あたかも自然的必然事として社会的に妥当し、階級的受苦性を自然史的受苦性に倒錯させる。この倒錯の一般化は、それ自体が、受苦の甘受としての階級的支配の貫徹である。

したがってここには、階級的な対立が客観的および主観的に展開する。この闘争場裡への登場人物は、それぞれの利害関心と生活感情において行動する。とくに資本の人格的定在たるものは、その自由な活動を、その「自由な概念」としての「目的」の実現に向かって、押し進める。しかし、そこには彼の意図するものとは全く別ものが、ほかならぬ彼の駆使する労働者諸個人のうちに形成される。資本家的生産は、それ自体の運動の中に、自己自身を揚棄する社会力量を形成し、それ自身の揚棄を客観的に推進する。

この過程の展開としての世界史は、まさに「理性の狡知」の君臨する過程である。このことを暗示するために、マルクスは『論理学』からの引用をあえて行なっていたのである。

以上にその要点をみた労働の本質諸規定のマルクスの展開は、社会の歴史的息使いを伝える力強い論述であり、それ自体がまた狡知に満ちている。

II 労働の社会的生産力

1 社会的生産力の諸規定

人間と自然との物質代謝を媒介するところの、自己を実証しつつある労働力能。このように規定される労働は、人間的＝類的能力の個別的＝普遍的発現である。この意味において、労働はその本質的＝抽象的规定においてすでに人間的＝社会的労働である。したがってまた、労働の生産力もまた、このような人間的＝社会的な労働の生産力である。そしてこの社会的生産力としてはじめて、労働の自然的生産力が実現するのである。

このようなものとして、労働の生産力は「何万年もの歴史の所産」である。それは、類型と段階を異にしつつ発展してきた人間的「種族力能 *Gattungsvermögen*」にほかならない。

このような歴史的所産としての自然的社会的生産力たる「労働の生産力」の量的規定要因は、この抽象の段階において、次のものと挙示される。i「労働者の平均的熟練度」ii「科学とその技術学的应用可能性の発展度」iii「生産過程の社会的結合」iv「生産諸手段の(作用) 範囲と効率性」v「純粋な自然的諸条件」(K. I. 44, C. 15, ①121)。

このような量的規定性を帯びた社会的自然的生産力。これを通例に「労働の生産力」と言い、これを労働の自然的生産力に等置するが、しかしそれはすぐれて、労働の社会的＝歴史的生産力なのである。

この労働の生産力が、社会的分業を通じての私的労働の社会的編成としての市民社会においては、この構成者たる私的労働者の個体的＝社会的力能の発現＝力として実存する。社会的分業が私的諸資本の社会的編成として形成される資本家社会にあっては、それは、私的資本の個体的＝社会的な力能の発現＝力として実存する。

ここに私的資本 *Privatkapital* が社会的総資本 *gesellschaftliches Gesamtkapital* の個別的資本 *individuelles Kapital* として有する生産力は、「私的

力 Privatkraft) としてある「一つの集団力 eine Massenkraft」である。それは、この私的資本が包摂する多数の個別的労働者 individuelle Arbeiter の「個体的生産力 individuelle Produktionskraft」の一集合である。このようなものとしてそれは「一つの集合(総)力 eine Gesamtkraft」である。そしてこの「集合力」を構成する個体的諸労働者は、「一つの社会的集合労働者 ein gesellschaftlicher Gesamtarbeiter」の「一器官 ein Organ」としての機能において実存する。

この社会的集合労働者の生産力は、その構成者たる個別的労働者の生産力の総和以上のものであり、「資本にとって全く要費しない」。そして、このゆえに、「それ[社会的労働者の生産力]は、資本が生まれながらにもつ生産力として、資本の内在的生产力として、現われ出る。」(K. I. 349, C. 144, ③559)

(ここに「社会的集合労働者」として提示される概念は、「社会的労働者」または「集合的労働者」という短縮名で表現される。本稿では、主として後者を用いることにする。そして、この概念の固有の意義については、次号掲載の拙稿後続分において解明する。)

資本は、このようなものとしての生産力を、自由な労働者からの個体的労働力の購買を通じて、彼らを一つの「協業 Kooperation」に組織することによって、構成する。(ここに協業とは、「同一生産過程、または相異なるが連結した諸生産過程において、多数の労働者が共通の目的のために一体となって機能する」(C. 141) ことと定義される。)

この意味での協業を社会的に組織することは、資本に独自なことである。資本は、このような協業体 Kooperationskörper = 協業者 Kooperierende を社会的に組織することにより、自己の私的な「一生産力 eine Produktionskraft」としてそれをわがものとし、そのことによって、資本間の社会的分業を進展させ、この社会的分業の「社会的利益」を独占する⁷⁾。

7) この「生産力」は、生産諸関係の分業=協業的諸力であり、それ自体が一つの生産関係でもある。E. バリバルが、「理論的観点からすれば『生産諸力』もまた、一つの生産関係でもある」と前掲書(邦訳335ページ)で指摘するとき、この生産力に内有する独占力=領有力の關係性、

したがって資本は、その展開において、この私的独占としての敵対的な性格を深める。しかし同時にそれは、協業を発展させる。すなわち、人間の「種族力能」を開発させる。その直接的な社会性＝人間性を高揚させる。それは、小商品生産者の「農民経営や独立手工業経営」の分立＝分散（その反面での自由）に対立して、「生産過程の社会的結合」を深め、「労働過程の社会的過程への転化のための歴史必然」を媒介する。すなわち、そのうえに、「労働の平均的熟練度」を高めるだけでなく、「科学とその技術学的応用可能性の発展度」を高め、機械等の「生産諸手段の作用範囲およびその効率性」を高度化し、より深くかつ広く「自然的諸条件」を再開発する。

かく歴史的に機能する協業は、その主要形態としては「分業にもとづく協業」たる「マニュファクチュア」の姿で現われ出る。そして「一大自動装置としての機械制大工業」においては、「部分的諸作業機の結合」として、また、「作業機・伝導機・発動機の連結」として、客観的に「再現する」。かくして労働の生産力は機械の生産力の様相を深めていく。つまり物象たる資本の生産力がブルジョアのリアリティをもつ。

この「機械の協業」および「個別的＝部分的労働者の協業」は、歴史的に独自のものであるはずである。それは「資本家的協業」であって、「協業そのもの」ではない。協業としては、「人類文化の初期」に「狩猟民族またはインド共同体」に固有な協業が存在することを、ひとは知っている。総じて言えば、「古典古代世界、中世および近代植民地」において、自然的共同体としての協業が存在した。それらは、「個々人がまだ彼の種族または共同体の臍帯から離れていないこと」つまり人格の依存性に規定され、その構成員による「生産諸手段の共同所有 *Gemeineigentum*」によって特質づけられている。これら前近代的協業諸形態に共通する二大条件に対して、資本家的協業は明らかに対立的

＼に注目している。高島善哉教授は、前掲論稿「生産力の構造」以来、「生産力と生産関係の同一性」を「その対立性」とともに強調し、その中間項として「労働関係」範疇の導入を試みられてこられた。この重大な論点は、マルクスのテキストでの概念構成においては、社会的労働の諸規定として展開されていると、私は考えるものである。

である。生産手段の資本家的私的所有、その下への自由な労働者の包摂。この点において協業の資本家的形態の独自性は明白である。

「この協業の資本家的形態は、歴史的には農民経営と独立手工業経営に対立して発展してきた。」(K. I. 350, C. 145, ③560) この歴史的過程をふまえて、協業の資本家的形態を前近代的形態に対比するとき、協業の資本家的形態が、実は歴史的に独自なものであるはずであるにも拘わらず、物象たる資本の自然的性格であるように見える。協業こそ資本に独自な歴史的形態として見える。この倒錯的事態こそ、資本の存在すなわち支配が社会的同意を獲得する根拠なのである。この物象的転倒性はマルクスによって次のように特記された。「それら〔小経営〕の眼前に資本家的協業は協業の独自の歴史形態として現象するのではなく、逆に、協業そのもの *cooperation elle-même*, *Kooperation selbst* が資本家的生産の特自的形態として現象する。」(C. 145, K. I. 350, ③560)

2 社会的生産力の倒錯性と変革性

この倒錯 *Quidproquo* は、そのものとして意識の転倒にはかならないが、同時にそれは、現実に進展している歴史過程の倒錯的表現にはかならない。そしてそれ自体客観的な転倒過程たる歴史過程は、現実の資本家的生産様式の発展、そのマニュファクチュアとしての出発、機械制大工業への移行、大工業と大農業の並行、それらを通じての労働過程の科学的過程への転化、の全過程として進展する。資本家的生産における物的生産力の増大として実現する資本の生産力の展開は、その各段階ごと、この生産力の社会的規定要因たる生産関係との矛盾を深める。と同時に、これら社会的生産諸関係によって規定された生産諸力そのものにおける内的分裂を進展させる。

その諸段階を詳論する余裕が与えられていないので、各段階の敵対的自己矛盾性を端的に指摘するマルクスの言葉を、ここに要約して、記録にとどめることにする。

i マニュファクチュア

「マニユファクチュア分業は一方で、社会の経済的形成過程における歴史的進歩および必然的發展契機として現象する。だが他方では、文明化され洗練化された搾取の一手段として現象する。」(K. I. 383, C. 158, ③603-4)「それは、……社会的生産諸過程の質的編成と量的比例性を創造する。すなわち、一定の社会的労働の組織を創造する。と同時に、労働の新たな社会的生産力を発展させる。……しかしそれは、相対的剰余価値を産み出すための特殊な一方法であるにすぎない。それは、労働の社会的生産力を、労働者のためにではなく資本家のために発展させるのであるが、しかし、それを、個体的労働者の不具化【解体】を通じて行なう。」(ibid.)「部分機能への労働者の生涯的合体」による「部分人間化」。

マニユファクチュア分業は社会内分業と相ともに進み、相互に規定しあう。しかも、マニユファクチュア内における「資本家の無条件の権威」＝資本の専制と社会内における「競争の権威」＝無政府性とは、相互に制約しあい、マニユファクチュア的結合労働者の解放を制約する。しかもなおそこには、「協業そのもの」のもつ自己解放性が潜行する。「社会的労働の普遍的組織化」が、その精神的肉体的全人格性を否定されつつあるマニユファクチュア労働者によって感知され、また時代の良心によって、このことが思想的に鼓舞される。

ii 機械制大工業

機械制大工業においては、労働過程の編成が「全く客観的で非人格的な生産有機体」として展開しており、そこにおける労働は「直接に社会化された・または協同的な労働」として行なわれる。そしてこのような「労働過程の協業的性格が、労働手段そのものの【協同的】本性によって命じられた技術的必然となっている。」その協同的労働をも、機械は、その自然力の発揮によって代位しようとする。「機械において労働手段は、自然諸力による人間力の代置と自然科学の意識的応用による経験的熟練の代置を条件づける物質的実存様式を受け取る。」(K. I. 404, C. 167, ③630)

しかもなお、このような労働排除型機械は、労働を廃絶することができない。

資本としての機械であるかぎり、労働過程の科学的過程への転化を推進しながら、しかもなお、資本たる自己から排除された人間たる労働者を存続させるからである。労働者なき資本とは形容矛盾である。したがって資本はその「旧式分業の廃絶」を促進しつつ、新式分業（労働分割）の再編成を行なう。したがってそこに、「労働における転換、諸機能の流動性、労働者の普遍的移動可能性」が資本にとって必然である。それは資本としての大工業にとって「技術的必然性」である。そして、この技術的必然性は資本家的生産諸関係との「絶対的矛盾」に入る。

この矛盾は、資本家をして新しい教育制度を、その労働過程総体の必要に応じて創建させるものであり、労働者に対しては、「彼自身の諸能力をただ自由に発展させうる全面的個人」へと自己を形成することを、客観的必然たらしめる。この「絶対的矛盾」が資本家に、資本に必要な「人権目録」たる「保険および教育法令」を中軸とする「工場立法」を口授するとき、労働者に向かっては、「国法」＝および「国家権力」の取得を含む「社会的権力」の樹立を促進する。マルクスは、「近代工業の技術的基礎は革命的である」と確認したとき、このことが社会的革命の必然的根拠であることを告知していたのである。そのために、彼は、彼自身の『共産主義宣言』をこの問題の論述個所に注記したのである。(cf. K. I. 512, C. 210, ③774)

iii 大工業と大農業

上記に見たように、資本の物的生産力の諸様相についての明示的叙述は、その社会的生産力たる内的根源性における批判的＝変革的諸エレメントの、明示的および暗示的記述を、殆どつねに伴うのであり、その記述は、およそ科学主義とは無縁であると言わねばならぬ。資本家的生産力の大工場形態の展開に関連して、マルクスが農業と工業の資本による掌握のうちに、次のような生産諸力の弁証法を見ていたことを、我々はここに確認しよう。

「いまや、ありきたりの非合理きわまる経営は、科学の技術的应用に取って換えられる。資本家的生産様式は、農業と工業とのその端初における結合の紐

帯を、この兩者の間において、最終的に破砕する。だがしかしそれは、同時に、より高次の新しい総合への物質的諸条件を創造する。この新しい総合とは、農業と工業とのおのおのが、それらが兩者の完全な分離の時期を通じて獲得してきた発展の基礎のうちに、それら兩者を結合することである。この生産様式が大中心地に集積させる都市人口の日々増大する優越と歩調をともにして展開するのであるが、この生産様式が展開し、それは一方で、社会の歴史的原始動力を集積しながら、同様に他方では、都市労働者の肉体的健康と農村勤労者の知的生命を破壊する。しかしそれだけではないのだ。この資本家的生産様式は、人間と自然との間の物質代謝を攪乱させるのである。すなわち、食料・衣料などの形で土地から奪い去られ浪費される化学的諸成分すなわち土地豊度の諸復元を、ますます困難ならしめることによって、この物質代謝を攪乱させるのである。しかし、この資本家的生産様式は、遅れた社会が殆ど自然發生的にこの物質代謝を遂行する諸条件を、転倒させることによって、かえって、この物質代謝を、統合的な人間的発展にふさわしい形態で、社会的生産の規制的法則として、体系的に再建することを、強制する。」(K. I. 530-1, C. 217, ③799-800。フランス語版に変更あり)

ブルジョアの現代における大工業と大農業の分離は、「あらゆる発展した分業の基礎」たる「都市と農村との分離」(これは「商品交換によって媒介された分業の基礎」にほかならぬ。)の最近代的展開である。この「都市と農村との分離」は、それ自体が統一されてあるほかない人間の「自然力」と「社会力」との分離にほかならぬのであり、この意味において、それは、「社会の全経済史がこの対立の運動に要約される」(K. I. 369, C. 153, ③586)と評せられるものである。

資本家的生産様式による農業と工業との両面掌握を通じての、「社会の歴史的原始動力」(協同的生産手段と社会的協同的労働)の集積と、都市および農村の労働者における肉体的健康と知的生命の破壊の同時展開。この主体的にして客体的な矛盾こそが、攪乱された物質代謝過程再建の必然性を歴史的に媒介す

るのである。生きた人格性としての人間の身体性に宿る労働力能。資本によるその外化＝顕勢化のうちに不可避に形成される潜勢としての自然的社会的諸力。これが、資本家の諸矛盾の外的展開のうちに、その揚棄を実現するのであり、人間と自然との物質代謝における人間主義と自然主義の対立を揚棄するのである。

次号掲載予定分は、このことを、「集合的労働者」概念の検討から再開始して、展開するものである。